

女性弁理士の生きる道

会員 小磯 貴子

要 約

先に予定の入ったものから順番に、あるいは自分の得意な分野のものから順番に物事をこなして、気負わず肩の力を抜いて、仕事と家庭を両立していきましょう。発明者の思いを形にして明るい未来を作り出すお手伝いができる「弁理士」という仕事を、末永く存分に楽しみましょう！

目次

1. はじめに
2. これで2度目
3. リケジヨの進む道
4. 「弁理士」との出会い
5. 「なでしこ士業」に入れてください！
6. 両立の定義を変えませんか？
7. 判断の基準は「私」
8. 仕事を続ける秘訣
9. おわりに

1. はじめに

「知財の仕事で活躍する女性」というお題の、明るい論調の体験談を、とのご依頼を受けた。私が活躍しているかどうかは定かではないが、知財の仕事をしていることは間違いなく、また、明るい論調の体験談やアドバイスなら書けそうだと思います、お引き受けすることにした。日々真面目にお仕事されている男性諸氏は眉をひそめるかもしれないと思いつつ、こんな感じでゆるく働いている弁理士もいるのだと気楽に読んでいただければ幸いです。

2. これで2度目

「〇〇業界で働く女性」というテーマで文章を書くのは実は初めてではない。思い返せば20年前、某石油化学会社の研究員だった私は、石油化学業界誌に駄文を投稿したことがある。そのときも、男性中心の職場で明るく頑張っている女性のエッセイを、という依頼だったように思う。私の仕事に取り組む姿勢がそう見えるのか、どうも私は「明るく仕事をしている人」に見えるらしい。入社2年目のお気楽社員だった私

は、テーマについて深く考えることもなく、「未知の分野の研究テーマに挑むときは、見知らぬ国を旅するように、言葉を覚え、道を探索しながら目的地を見つけたい」というような内容のエッセイを書いたのである。この文章が社内的には思いの外好評で、人事部から、社内報の通信員になるように、という命を受けたものだから驚きである。何の気なしに書いた文章、あるいは何の気なしに口にした発言が、会社での立場に影響することを知り、会社って怖いよねー、と改めて思ったのであった。

それにしても、20年も時を経ているにもかかわらず、相変わらず同じテーマで文章を書くとは！女性の働く環境なんて、実はちっとも改善されていないのかもしれない。それとも単に私に進歩がないだけなのか？

3. リケジヨの進む道

私は化学を専門とする弁理士である。大学では工学部の化学科にいた。私が大学生だった頃、工学部の学生1000人のうち女子学生は30人だった。当時は「工学部女子の会」という会合が持たれており、30人はみな仲が良かった。女子学生の数があまりにも少なすぎて、徒党を組まなければやっていられない状況だったのだろう。当時は工学部の女子自体が奇異な存在だったらしく、いろいろなことを言われたり様々な扱いを受けたりした。「工学部女子の会」では、そういったエピソードを分かち合い、みんなで笑い飛ばしていた。私が塾講師のアルバイトの面接に赴いたときに「工学部の方なのに、ずいぶん小さいんですね」と言われた話を披露したときは爆笑だった。工学部女子は、大女

でなければならないという決まりでもあるのか？世間の思いこみやレッテルというのは恐ろしい。いまでこそ「リケジョ」などともはやされている理系女子であるが、昔はこんなものだったのである（注：反面、いわゆる希少価値により、得をしたことも沢山ありました。）。

私は小さい頃から、自分が受けた恩は社会に還元しなければならない、というある種の使命感のようなものに燃えている、今思うと何とも不思議な子どもだったのだが、特に大学生の頃は、学生時代に勉強したことを社会に生かすにはどうしたらよいかをいつも考えていた。色々悩んだ挙げ句、せっかく化学の勉強をしたのだから、環境保全やエネルギー問題を化学材料の側面から考えていきたい、と考え、件の石油化学会社に就職した。そして、研究者として末永く働きたい、と考えていた。

4. 「弁理士」との出会い

こうして夢と希望でいっぱいの中入社した石油化学メーカーの社員研修に「特許研修」なるプログラムがあった。国民宿舎に宿泊しながら、特許とは何か、に始まり、新規性、進歩性等の基本的な概念から外国出願にいたるまで、特許にまつわるあらゆることをみっちり学ぶものだった。私はこのとき生まれて初めて「弁理士」にお会いしたのである。学生の頃から、そういう職業があるらしい、ということは何となく知ってはいたものの、「実物」を見たことがなかったため、ものすごく遠い世界の人だと思っていた。私は研修内容そっちのけで、「弁理士」というのはいったい何をする人なのか？と講師の先生にお尋ねした。すると、「朝から晩まで明細書と引例とを読み、文書を作成する仕事」らしい、ということがわかった（注：講師の先生の名誉のために断っておくと、先生は決してそのような説明はなさらなかったです。私が勝手に、そのように解釈した、ということです。）。小学生の頃から、図書室に通っては「どうやってここにある本を全部読むか」と日々頭を悩ませるほどの活字中毒（注：「読書家」というわけではありません。）の私にとって、「弁理士」というのは大変魅力的な職業に映った。そこで、弁理士になるにはどうすればいいのか？と先生にお聞きしたところ、合格率のかなり低い試験に合格しなければならないこと、試験を受けるためには何年も勉強しなければならないこと、を教えられた。「じゃ

あ、やってみよう！」とすぐに考えるところが若さゆえの浅薄さであり、思い切りの良さでもある。特許研修に行ったのに特許のことは何一つ学ばず、なぜか「弁理士になるぞ」という決意だけを抱いて帰宅した私は、書店に行ったり受験機関の資料を集めたりし始めた。

メーカーには入ったものの、理系の女性が一生仕事をし続けるには、何か際立った特徴がないと難しいだろう、というのがおぼろげにわかってきていた頃だった。そんなとき、タイミング良く出会った弁理士という職業。幸い技術文書を読んだり書いたりすることには抵抗がないので、受験勉強中も、そして紆余曲折を経て晴れて弁理士となった今も、本当に毎日楽しく技術に、そして活字に接している。特許研修の講師を務めてくださった先生は、まさに私の恩人である。いつかお礼に伺いたいと思いつつ、なんと15年以上の年月が過ぎてしまった。

先生、その節は大変お世話になりました。おかげでなんとか細々と仕事を続けています。

5. 「なでしこ士業」に入れてください！

弁護士、公認会計士等、いわゆる「士（サムライ）業」の女性に追い風が吹いているという記事を読んだ（出典：日本経済新聞）。いわく、相続税法の改正により遺産に関する相談が増えている昨今、遺産相続人は圧倒的に女性が多く(!)、女性が相談しやすい女性士業（なでしこ士業）が注目されているとのこと。また、安倍内閣の「女性が輝く日本へ」のスローガン効果なのか何なのか、働く女性が増加するにしたがい働く女性のトラブルも増え、なでしこ士業の活躍の場が増えているらしい。記事の中に出ていた士業の女性比率が興味深い。弁護士：18.1%、公認会計士：15.4%、社会保険労務士：28.1%、税理士：14.2%、司法書士：16.2%だそう。どれどれ、弁理士は？と見たところ、弁理士は、なんとデータなし！ええーっ？一応「士業」だと思っていたんだけどなあ。ちなみに女性弁理士の割合は14%（2013年度末、出典：平成26年度版弁理士白書）だそう。弁理士は女性の割合が少ない士業のひとつのようだ。

夫の郷里での結婚披露宴で、「東京の“ベンリヤ”は、アンテナの修理をしたり犬のお散歩をしたりするのではなく、“専売特許”というのを出すのだそうです！」（注：訂正すべき点が多々あることは承知してい

ましたが、何しろ重い髪と帯の苦しさでそれどころではなかったのです。)と司会者に紹介された私は、「弁理士」というのはあまりポピュラーな職業ではないと薄々感じていたものの、日経新聞でもこれかあ、と少し残念ではある。

しかしながら、よく考えてみると、「弁理士」という職業ほど男女差がない職業というのも他にないのではないか。弁理士周りの仕事で、女性でないと受けられない相談、というものはほとんどないと言ってよい。家庭用品や化粧品、女性用下着等、「女性用〇〇」という技術分野もなくはないが、今日日、洗濯くらい男性もするだろうし、男性もお化粧する時代だし、と考えると、女性弁理士ならでは、という分野は皆無と言ってよい。法律知識と技術理解力が備わっていれば、弁理士が男性だろうと女性だろうと、相談者にとってはどちらでもいいはずである。こういう事情から、弁理士は「なでしこ士業」の仲間に入れてもらえないのかもしれない。つまり、弁理士業界では、女性、というだけでは差別化できない(新規性がない)ということだ。あらあら、どうしたものか?ここで、私が弁理士を志した当初の目的は「理系の女性が一生仕事をし続けること」であったが、それを達成するには、やはり、際立った特徴(進歩性)がなければならぬ、という結論に達する。進歩性の主張は難しいよね、とつくづく思う。「私」でなければならぬ理由って、何かあるかしら?あとは人間的な魅力で勝負よ、とうそぶきながら、実は毎日ヒヤヒヤもので仕事をしているのである。

6. 両立の定義を変えませんか?

そろそろ本論らしきものに入らないといけないので、少し真面目に考えてみたい。弁理士に限らず、女性が働く上で避けて通れない大問題である「仕事と家庭の両立」について。私は特許事務所でフルタイムで働き、家では妻であり2児の母である。PTAの本部役員という顔もあるし、卓球サークルの部長も務めている。このような状況を見た人は必ず「よく両立できますね」とおっしゃる。誉めてくださる人には誠に申し訳ないのだが、「両立」という語を「どちらも完璧にこなす」という意味であると取るなら、私は決して「両立」などしていない。ある分野においては非常に残念な状況にあるのが現実だ(どの分野が“残念”なのかはご想像にお任せします。。「仕事と家庭の両立」

という語には、責任ある仕事を受け持ち、かつ一定水準以上の生活をすべし、というような、ある種の押しつけがましきがある。これを、私には荷が重い、負担だ、感じてしまう女性が多いのかもしれない。だがそもそも、仕事と家庭をどちらも完璧にこなしている男性などいるのだろうか?残念ながら私はそのような男性にお目にかかったことはない。男性にできないのに女性にばかり「両立」を求めないで欲しい。「仕事と家庭の両立」が女性だけの大きな問題になること自体がおかしい。

「両立」を“両方完璧に”と受け取るから話が難しくなるのであって、“一応両方やっています”というのも全部「両立」している状態と考えれば、ぐっと気が楽になるのではないだろうか。人間誰しもいろいろな社会的立場と役割を持って生活しているはずだから、こんなに沢山の役割をこなす私って、ちゃんと両立しているよね、と考えれば、老若男女、みなハッピーになれるのに、と思う。

仕事も家庭も100%完璧にこなすことなど無理である。私の100%はクライアントの100%とは違うのかもしれないのだから、100%という尺度自体がそもそも無意味だ。日々お菓子食べ散らかし放題、おもちゃ散らかし放題の子どもがいる家庭で、毎日完璧に掃除をするなど不可能に近い。であるなら、自分の基準で80%くらいできれば、もっと言ってしまえば、5割くらいできれば、まあよしとするか、と切り上げることも必要だ。帰宅したらゴミを20個拾おう、程度の肩の力を抜いたノルマを自分に課すくらいで充分だと思う。私のモットーは、「何でも適当にやる」である。ここで言う「適当」とは、若者が使う「テキトー!」、すなわち、いいかげん、おざなり、ということではない。文字通り、「適当に」「適切に」という意味で、「適度に」と置き換えてもいいかもしれない。何を以て「適当」と考えるか?いろいろなことを両立するために、いつも考えていなければならない、永遠のテーマである。

7. 判断の基準は「私」

さて、色々な立場を「両立」する上で、今どちらをすべきか?という判断に迫られる場面はよくある。また、限りある時間と能力をどのような配分で注ぐのか?という決断をしなければならないときもある。仕事術のハウツー本を読むと、「優先順位をつけなさい」というご指南があるのだが、仕事と家庭と学校行事と

町内会と、,、と常に複数の事象が重なり、そのたびに決断を迫られている女性は、そんなこと、言われなくても当たり前のようにこなしているのである。ここで、優先順位の付け方であるが、基本的には先着順にするのが良い。先に入った予定が何よりも優先、すなわち先願主義である。大事なクライアントのアポだから、という理由で、先に入った予定を変更することはしない。上の子の予定だから、とか、下の子がかわいそうだから、とか、そういうことで順位を決めたりもしない。そういうことをすると、順位を変更しなければならぬ事情がいくつも出てきてしまい、判断がぶれてしまう。あくまで、先に言ったもの勝ち、先に入った予定を優先とする。

一方、「するか、しないか」を考えるとときには、すべて「私がしたいかどうか」「私のためになるかどうか」で決めるのが良い。私は、どんなに時間がないときでも料理の際にはかならず鰹や煮干しでだしを取るが、これは夫の健康を気遣うためでも子どもの味覚を育てるためでもない。「私」が化学調味料の味が好きではないからだ。成績のふるわない子どもには、阿呆な娘の母親だと思われるのは「私」はイヤだ、というような叱り方をする。これを、あなたの将来のためよ、等と言うとややこしくなる。女の子は口が立つので、私の将来なんてお母さんに関係ない、余計なお世話、くらの口応えをする。そうすると売り言葉に買い言葉、泥仕合になってしまうので、言葉は慎重に選ばねばならないのである。

仕事においても同じで、私は基本的には自分のしたい仕事しかしない。と言うと、いったいどれだけ高飛車なのか、と思われそうだが、上にも述べたとおり、私は弁理士の仕事は基本的にどれも嫌いではないので、これまで、やりたくない仕事、というのにあたったことはない(注:「ひどく大変な、面倒な仕事」というのにあたったことはあります。しかし、「大変だから、面倒だから、やりたくない」という思考パターンには陥らないですね)。複数の仕事をこなすにあたっては、応答期限(こちらは「先願主義」の原則に従います。)との兼ね合いを考慮しつつ、おおむね自分の好きな順、得意な順で片付けていく。事務所にとって大事なクライアントだから、等、自分ではない他の要因を入れてしまうと、判断がぶれてしまう。ストレスフリーで仕事を続ける上で、ぶれない判断は私にとっては最も重要なポイントだ。自分の気持ちに正直に決

めたことなら責任が持てるし、万一失敗しても他人のせいにせずに済む。後悔することなくスッと割り切ることができるという点で、「私」基準、というのはお勧めだ。

8. 仕事を続ける秘訣

秘訣、等と書くと、さぞかしすごい裏技があるのだろう、と思われるかもしれないが、仕事を続ける秘訣はただ一つ、「健康を維持すること」である。子ども達が未だ小さかった頃、上の子を最寄りの保育園に預け、下の子を一つ先の駅の保育園に預けていたことがあった。何だか大変だなあ、と思いながら、毎日せせと遠回りをして子ども達を送迎していた。そんなある日、翌日が期限の意見書の構想を練るため、引例の束を自宅に持ち帰り、子ども達を寝かしつけた後にそれらを読もうとした。すると突然天井がぐるりと回り、そのままぱたり倒れてしまった。それまでに経験したことのないような高熱に驚いて、這うように救急病院にたどり着いたところ、極度の疲労が原因の複数の病名を告げられ、そのまま入院。熱にうなされながら、翌朝の子ども達の送り迎えをどうするか、それより何より、明日期限の意見書をどうするか、で頭がいっぱいだった。結局、意見書は職場の方がきちんと提出してくださり事なきを得た。そして夫の方は、「子ども2人連れてレストランに入ったら、シングルファーザーだと思われたみたいで、一品サービスしてもらっちゃったよ!」と暢気に笑っていた。先ほどの、「私」でなければならない理由が必要、とは矛盾するようだが、仕事も家庭も、別に「私」でなくてもちゃんと回るのである。しかしながらひとたび体調を崩すと間違いなく周囲に迷惑をかけるので、「健康の維持」は何よりも大事だと痛感した。

以来、医師、看護師、歯科医師等、医療関係者に出会うたびに「風邪をひかないようにするにはどうしたらいいですか?」と尋ねることにしている。みなさん、いろいろな秘訣を教えてくださいが、全員が共通しておっしゃったことはなんと「手洗い、うがい」であった。そんな簡単なこと、と絶句ものだが、これだけ沢山の医療従事者がそう言うのだから、風邪予防には「手洗い、うがい」というのはまず間違いのないのだろう。特に歯科医の友人が、朝一番に何か口にする前に一度うがいをするといいよ、と勧めてくれたことがずっと頭に残っており、まるでおまじないのように毎

朝起きるとうがいをするようにしている。おまじないの効果なのか、気の持ちようなのか、それ以来ひどい風邪というのは引かなくなった。

私の究極の目標は、おばあちゃんになっても、体と頭健康が続く限りは自分の食い扶持を稼ぐこと、である。そのためには、今のうちからしっかり食べ運動して身体に栄養を蓄えるだけでなく、美しいものを見、楽しい経験をして感動という心の栄養を蓄えておかないと、と思っている。

9. おわりに

天文オタクの息子に付き合っ、宇宙物理学者の佐藤勝彦氏の講演会に出席した。宇宙のお話は私にはちんぷんかんぷんであったが、一つだけ心に残ったことがある。環境破壊、原発問題、食糧問題等、喫緊の課題はたくさんあるが、人間の叡智を結集すれば必ずや解決できると思う、と述べておられたのである。人間の能力は計り知れない、と常々考える私に、この言葉はストーンと腑に落ちるものであった。

翻って私がいつも作成している特許明細書というものも、人間の叡智の塊のようなものである。解決すべき

課題、その解決手段、そして解決手段により実際に課題が解決できた、というストーリーが一つに盛り込まれた、何と夢のある文書であることよ！発明者の意気込みが全体から感じられるような、ワクワクする明細書を読むと、私もこういう明細書を作成したい、と思う。今そこにある問題を、何か新しい技術を生み出すことで解決しよう、という発明者の思いを形にするのが理系弁理士の役割だとすると、形になった一つ一つの思いが結集すれば、20年後の未来は今より明るくなっているかもしれないではないか。先ほど述べた士業の中でも、かように未来志向の強い弁理士という仕事に就けたことは幸せである。

仕事にも家庭にも解決しなければならない課題は山積みだが、ただうなだれて立ち止まっているより半歩でも先に進む努力をする方がよほど生産的だ。新しい技術に関心を持ち続けて、科学技術を通じて世の中を良くするお手伝いができる弁理士になれるように、そして、明るく楽しい家庭、学校、地域社会を築くことに貢献できる一個人になれるように、目標はあくまで大きく、日々研鑽していきたいと思う。

(原稿受領 2015. 6. 15)